

の音) 今他家の表で錢を貰ふてる夢を見てた、ア、喉が渴いた……、コレ嬢さん、水でも湯でも一杯飲ましてんか、コレ……ア、居んがな、何處へ行つたんやろ……」

其處等を見廻しますと行燈に着物が掛つて障子が開いてますので、さてはと思ふて拔足差足で雨戸の處へ來て様子を窺ふて居りますと、常念寺の墓場でバリ／＼と云ふ音が聞へる。

「そーら、ポツ／＼始めやがつたな、何糞め、バリ／＼位ひは何の怖い事があるもんか、と云ふものゝ其の實餘りくださらぬ……」

ガチ／＼と齒の根も合ひまへん、それ位怖けりや見んでもよいのに怖い物見たしで、ブル／＼と震ひながら四ツ這ひになつて築山へ登りまして、松の枝に縋り漸う登つて斯う下を見下しますと、拍子の悪い月に雲が掛つて暗黒で何が何やらさつぱり解りまへん、石碑の間でバリ／＼と云ふ音だけ聞へて居ます、驚いてウワーツと聲を立てやうとしたが、聲を揚げてはならんと思ひ、齒を咬み締めて氣張つて居りますが、悲しい事には手足が承知しまへん、ブル／＼と震ふ途端に松の木の葉がバラ／＼と落ましたので、

「アレ、風も吹ぬに木の葉が落るとは、何うした事ぢやろ……」

ヒョイと見上げるのんと、若旦那は見下す、此の時雲が晴れて月は亘え渡りましたので、互に見合す顔と顔。

「アレーツ、若旦那様……」

「ナ、ナ何んぢやいな」

「斯様な淺ましい姿を、お目に掛けまして定めし愛想が盡きましたでござりませうが、何うぞ不憫と思召して連添ふて下さりませ」

「嬢さん、そんな處で何をしてるねん、見せてみ、性さへ解つたらえゝがな」

「斯様な物で御座ります」

「もつと高を上げてみ、ウワーツ、甚い物を喰ふてんねんなア、そら嬰兒の腕やないか」

「ハイ左様で御座ります」

「妙な物が好きやねんな、好きならえゝがな明日から諸方へ頼んでおいて、貰ふて來て上げる、そうならそうと最初に云ふてくれたらこないに吃驚りせんのに、嬰兒の腕位はなんぢやいな」

「エツ、若旦那そんなら貴方も嬰兒の腕をお食りあそばすか」

「嬰兒どころか、私は親の脛を嚙つたわい」